

リヒャルト・ゾルゲと同盟通信社 30年代東京の激烈な情報戦

（拓殖大学海外事情研究所教授、時事通信社OB）



名越 健郎

ゾルゲ事件のスケール

旧ソ連の大物スパイ、リヒャルト・ゾルゲが戦前の東京を舞台に大規模な情報活動を展開し、摘発されたゾルゲ事件は、20世紀最大のスパイ事件だった。

1930年代は、世界制覇を狙うナチス・ドイツの野望、ソ連社会主義を死守するスターリンの猜疑心、アジア進出を目指す日本、日中戦争や内戦で混乱する中国、日独伊の覇権転覆を図る米英の策略などが交錯する壮絶な時代で、ゾルゲは東京で機密情報を大量に入手し、モスクワに打電した。ゾルゲ事件は、その政治性の高さ、スケールの大きい情報戦、多彩な登場人物、国際関係の敏感さ、戦争と平和の問題といった点で、通常のスパイ事件と異なり、関係各国で強い関心が寄せられた。わが国でも戦後数百年の関連書籍が出版されたが、なお解明されていない謎が少なくない。

筆者もゾルゲ事件に関心を持ち、時事通信の記者時代に資料入手を試み、10本以上の独自原稿を書いた。モスクワで書いた記事は、「ゾルゲの奔放な活動、モスクワが露呈を憂慮—ソ連軍情報機関連絡役が証言」「ゾルゲは独のスパイ」と夫人

に虚偽自白強要—ソ連捜査記録」「独ソ開戦日は予測できず—ロシア女性歴史家が新著で公表」「ゾルゲを指揮した謎の指揮官、メリニコフGRU次長」「独軍侵攻情報は「デマ」—スターリンがゾルゲ情報に鉛筆で走り書き」「日露戦争でもゾルゲ型スパイが暗躍—仏人記者が東京で機密情報入手—」など。

ワシントンでは国立公文書館でゾルゲ関係の文書を探し、「ゾルゲはスパイ、米英知っていた—30年代初期に上海警察が察知」「ゾルゲへの送金、旧ソ連が米国の銀行を使う—GHQが資金の流れを解明」「真珠湾攻撃、ドイツも寝耳に水—ゾルゲ事件で日独関係冷却—米がオット独大使から聴取」「ゾルゲは二重スパイ？—ソ連への情報、独大使に提供—GHQ文書」などを書いた。

これらの原稿は、本筋からやややそれるものの、中央紙や地方紙にかなり掲載していただいた。各紙のデスクがゾルゲ事件の重要性を認識していたためだろう。しかし、記者の世代交代が進み、近年は新聞でゾルゲ事件の記事を見掛けることはなくなかった。ゾルゲ事件はこのまま歴史に埋没していく可能性もあるが、事件は現代史研究で無視できないことも事実だ。21世紀に入っても、8月の

表）が発行する「ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集」で紹介されている。公文書館にアクセスできるアレクセーエフ氏は上海編に続いてゾルゲの東京時代に関する新著を準備中だが、2年前、同センター主催のシンポジウム出席のため来日した際、「執筆は進めているが、あちこちの機関の許可を得る必要がある、手続きが難しい」と筆者に話していた。プーチン政権による情報統制の壁が立ちあがるようだ。

同盟記者もエージェント

本稿では、ゾルゲと同盟通信の関係について調べてみた。ゾルゲは上海勤務を終えた後、モスクワのGRU本部で8カ月間訓練を積み、1933年（昭和8年）9月6日、米国経由で横浜港に上陸。41年10月18日に逮捕されるまで8年間東京で活動するが、ドイツ紙フランクフルター・ツァイトゥンク紙の東京特派員を装ったゾルゲにとつて、国策通信社の同盟通信は無視できない存在だった。36年に連合、電通の二つの通信社が合併して誕生し、終戦の45年まで活動する同盟の歩みはゾルゲ事件とも重複する。

摘発されたゾルゲ機関のメンバーの中に元同盟通信記者が1人いて、それが船越寿雄だった。船越は早稲田大を中退して27年に上海に行き、同盟の前身である連合の上海支局長として勤務する。29年に朝日新聞上海支局長だった尾崎秀実が主宰した研究会に参加して共産主義に親近感を持ち、尾崎らによって32年にゾルゲに紹介され、エージェントになった。船越は1年間、ほぼ5日置きに

ゾルゲに会い、中国における日本軍の動向や中国の政治事情を報告した。その後、読売新聞天津支局長、日本陸軍嘱託などを務めたが、ゾルゲ事件捜査の過程で名が上がり、42年に北京で逮捕された。裁判のため送還され、懲役10年の判決を受け、45年獄死。

船越については、アレクセーエフ氏の前掲書が詳しい。同書によれば、ゾルゲは船越を重用し、尾崎の帰国後は後任のように扱った。ゾルゲは32年3月、船越の情報に基づいて、「日本はソ連に対する攻撃準備をしているが、戦争は当分起きない。日本は数年後には米海軍に対抗できなくなる」と知っている。当面は米国を主敵とみなしている」と報告した。ゾルゲは自らの情報分析を踏まえ、「日本の満州侵略に米国が反対し続けるなら、日本にとって対米戦争の選択肢が強まる」などと日米開戦の可能性を予告した。ゾルゲの最大のスクープは、41年に発信したドイツ軍のソ連侵攻と日本の南進決定の2つだが、日本軍が対米戦争に傾いていることを早い段階でキャッチしていた。

「モリス」がコードネームの船越との接触は上海の外国人街にあるカフェやホテルのレストランで行われた。会話は英語で行われたとみられる。船越は連合通信上海支局長の肩書きを利用して日本の領事や軍人と接触し、軍事クーデターの可能性を含む日本の国内政治状況や日ソ、日中関係、南京政府と日本の交渉に関する情報や分析をゾルゲに提供。その内容はモスクワで評価され、ソ連国防省や情報機関トップに報告されたという。

新聞は「終戦紙面」が続いており、ゾルゲ事件の発掘にも挑戦してもらいたいものだ。

ロシアで新著作

とはいえ、さすがに日本では情報は出尽くし、新たな発掘は容易ではない。わが国では、1960年代にみず書房から刊行された『現代史資料—ゾルゲ事件全四巻』が裁判記録や検察の尋問、ゾルゲの獄中手記などを網羅しており、これが基礎資料となる。残る謎であるゾルゲ機関摘発の経緯は特高警察の捜査資料に記載されているはずだが、捜査資料は米軍の空爆で焼失したとされる。ただ、この種の資料は複製された可能性があり、突然発見されるかもしれない。

ゾルゲ事件の未公開資料が最も眠っているのはモスクワだろう。ソ連崩壊直後、ロシア政府が旧ソ連公文書を解禁した際、ゾルゲがモスクワに打電した極秘電報などが公開された。しかし、情報機関出身のプーチン大統領の下で情報公開は後退し、軍参謀本部情報総局（GRU）や大統領府の公文書館は閉ざされたままだ。

こうした中で、元GRUアーカビストのミハイル・アレクセーエフ氏が2010年、モスクワで『あなたのラムゼイ—ゾルゲと中国におけるソ連軍情報機関』と題する分厚い新著を出版した。同氏はGRUの公文書館に保存されているゾルゲ関連文書を調査し、1930年—33年に及んだゾルゲの上海時代の活動を記録した。これにより、ゾルゲの上海時代はほぼ解明されたとみられる。同書の抄訳は、日露歴史研究センター（白井久也代

しかし、同書によれば、ゾルゲの船越への評価は低く、「尾崎の情報よりレベルが低かった。記者なら誰でも知っていることを伝えてくる。知識は限定され、エネルギーが豊富ではない。尾崎への共感と、職場の給与が少ないうえに、謀報活動をしていたようだ」と本部に送った電報で酷評した。ゾルゲは「（船越は）今や私の唯一のソースだが、能力は低い。他には誰もいない」と指摘。32年10月に中国から最後に送った報告では「日本のエージェントとの仕事は楽ではなかった。成功とは言えない」と弱音を吐いた。日本人との協力に自信を失ったゾルゲが東京勤務を命じられるのは皮肉だ。

電通ビルに通う

同盟通信本社は33年に完成した銀座の電通ビルにあり、西銀座通りに面した当時珍しいモダンな8階建てだった。最上階の8階は外国報道機関の専用フロアで、ロイター通信、AFPの前身である仏アパス通信、AP、UP、ドイツのDNB、イタリアのステファニ通信などの支局が入った。同盟は手狭になったため、日米開戦翌月の42年1月、日比谷の市政会館に移った。戦後は2003年まで時事通信が市政会館を本社とした。

ゾルゲはソ連大使館に近い港区永坂町に2階建ての住宅を借り、そこを拠点に活動した。支局はなく、昼間はドイツ大使館や電通ビルなどの取材先を趣味のオートバイで回っていたらしい。ゾルゲは西銀座の電通ビル近くにあった。ゾルゲの愛人

で、戦後ゾルゲの墓を作った石井花子さんはライオンゴルドのホステスだった。

加藤哲郎・一橋大名教授が米国立公文書館で発見した米陸軍情報部の49年の資料によれば、ゾルゲはDNB通信のワイゼ支局長とチェス仲間で親しく、40年に支局長帰国中、2カ月間DNBの臨時支局長を務めたこともあるという。ゾルゲは、DNBの通訳・助手で、戦後日本共産党の北海道旭川地区委員長を務めた石島栄とも親しくなり、石島はゾルゲに政治情報やその背景を伝えていた。

当時、アバス通信の東京支局長で、著名な伝人ジャーナリスト、ロベール・ギランは著書『ゾルゲの時代』（中央公論社）で、「週2回、わたしは外務省の記者会見に出席した。老練な外交官の河相達夫のテールを囲んで、外人記者たちは現状について質問した。電通ビルの記者の他に、リヒャルト・ゾルゲらドイツの記者が5、6人、ハンガリーの記者、それにいつも黙っているソ連のタス通信の記者が2人いた。河相は極めて寡黙なスポークスマンで、ほとんど口を開かず、時折短く『ブーコメント』と言うだけだった。わたしは外人記者にとっては何ら得るところがなかった」と書いている。

ゾルゲは在京の外人記者の中で目立つ存在だった。ギランは「その姿を目の当たりにするだけで、ゾルゲという人間の力に圧倒されるところがあった。姿勢正しく、きつと正面を向いた顔、秀でた額の下の深いブルーの瞳、澄んでいるがときには厳しいその視線、精力的な顔つき、ライオン

と誰かがいついていたその顔には多くの苦難を通り抜けた男の深い皺が刻まれていた」「ゾルゲがドイツ人記者の第一人者であることは疑うべくもなかった。彼の毅然とした人柄は日本人を威圧し、外人社会において強固な威信を示していた」と記した。

記者からデスクに

『現代史資料・ゾルゲ事件一巻』によれば、ゾルゲは逮捕後にスパイ活動を告白した獄中手記で、東京での自らの情報源として、①ドイツ大使館②ドイツ人実業家・技師③東京のナチ党④オランダ人社会⑤ドイツ人記者⑥外国人特派員⑦同盟通信および日本人記者⑧陸軍省——を挙げた。

しかし、同盟については、「私が同盟と関係を保っていたのは日本に着いた当座だけのことで、しかも通り一遍の接触を保っていたにすぎない。後になると、興味がなかったもので、この関係さえやめ、もっぱらブケリッチらのもたらす情報に依存した。私はこの数年、諜報グループに属する以外の日本人とはなるべく会わないようにした。それまではドイツ人記者と一緒に朝日、東京日日、同盟の記者と交わっていた。それは自分の任務の一部として招待したのであって、日本人との関係をすっぱり絶ったような印象を与えないのが目的だった。私はその際、隠れた諜報的な狙いを念頭に置かなかった。というのも、そうしないと彼らから面白い情報を得られないことをよく承知していたからだ」とし、同盟をあまり重視しなかったことを明らかにしている。ゾルゲにとって、記者

活動は諜報活動の隠れみだった。

「この数年日本人と会わないようにした」とあるのは、38年以降、ゾルゲの諜報活動が質的に変わったことを示唆している。38年4月に盟友だったドイツ大使館のオット陸軍武官が大使に昇格。ゾルゲはドイツ大使館にオフィスを与えられ、ドイツ大使館に入り浸るようになった。7月には尾崎が朝日新聞を退社し、近衛内閣の囑託となり、最高機密情報にアクセスできるようになった。滞在5年を経て、情報ネットワークが機能し始め、自ら歩いて情報を取る必要がなくなったようだ。同年5月に米大使館前でオートバイ事故を起こして重傷を負ったことも、出無精にしたとみられる。メディア的に言えば、ゾルゲは次第に、取材記者からデスクの役回りに変わった。

ブケリッチの暗躍

しかし、ゾルゲは諜報団で尾崎に次ぐ重要な位置を占めたアバス通信記者のブケリッチを通じて同盟通信の情報を重宝した。ブケリッチはクロアチア人で、32年にコミンテルンの指示で来日。ゾルゲ機関の一員となった。裁判で無期懲役となり、45年1月網走刑務所で獄死する。

ゾルゲは獄中手記で、「ブケリッチの情報の出所が一番重要だったのは同盟通信社であった。彼は仕事の関係で毎日同盟へ行っていたので、容易に各種の情報を見つけ出すことができ、その中には発表された情報もあれば、未発表の情報もあった。重要な情報は得られなかったが、私のグループが他の筋から得た大量の情報に対する補足の意味

味で大切で、興味もあった。第2次大戦に対する同盟社内の空気や独ソ戦が勃発した当時における同盟社内の気分について彼が報告した時など、その感じが強かった。同盟は決して親独的ではなく、その対応は大多数の日本人の感情を伝えるものだった。ブケリッチは、同盟では周知のニュースでも、検閲の結果一般に発表されていないものもよく手に入れた」と書いている。「同盟は決して親独的でない」とのゾルゲの指摘は興味深い。

ブケリッチのボスだったギラン支局長によると、「話し上手の彼は、政治への関心が人一倍強く、国際的な事件と日本の政治について巧みな弁舌で解説した」という。ブケリッチの最大のスクープは、「東京の信頼すべき筋によれば、ベルリン、モスクワで、ヒトラー、スターリン間の不可侵条約締結に向けて独ソ交渉が行われている」という39年8月の一報だった。ドイツ政府はこの情報を全面否定したが、1週間後に独ソ不可侵条約調印を公表し、アバスの大スクープとなった。ブケリッチは支局長に対し、情報源がゾルゲであることを打ち明けた。ゾルゲはドイツ大使館でこの情報を入手したとみられるが、ヒトラーを憎悪するゾルゲは独ソ条約を好感せず、アバスに報道させることで調印の妨害を図ったかもしれない。

「戦争を憎む」

『ゾルゲの時代』によると、ギランはゾルゲと取材先でよく一緒にあったものの、仏独関係が険悪だったため、言葉を交わすことはなかったという。しかし、39年9月、一度だけ2人で食事した

ことがあった。それは、英仏とドイツが開戦した翌日のことだった。

「午前中、欧州から入ってくる情報をむさぼるように読み、正午ごろ食事に行こうと同盟ビル8階の支局を出ると、8階の廊下で正面のオフィスからゾルゲが出てきた。彼はDNB通信の支局を出るところだった。ゾルゲも私と同じように、ニュースを読みに来ていたのだろう。われわれは偶然、鉢合わせをした。私はめったに怒ったりしないが、この日はものすごい例外で、生涯ただ一度の怒りが爆発し、ゾルゲに対し、『どうとうやっちな。ドイツ野郎め。また始めやがって。お前たちは血を見るのが好きな残酷無比な奴らだ』などと腕をつかんで叫んだ」

ギランはエレベーターの中に日本人が4、5人いてもゾルゲをのり続けた。ゾルゲはずっと黙っていたが、ビルの玄関で初めて口を開き、「一緒に食事をしないか」と誘った。ゾルゲは西銀座の新橋寄りにあったドイツ料理店「ローマイヤ」にギランを招き、地下の席で、「私は戦争を憎む。あらゆる戦争を憎む」と述べ、第1次大戦で3度負傷して以来、生涯戦争を憎んでいるなどと告白した。奇妙な安堵感を抱いたギランは「もう二度とないと思うが、話してくれて感謝する」と握手して別れ、ゾルゲは数寄屋橋方面へ去っていった。

ギランは「ゾルゲは苦悩にさいなまれている人間のような印象だった。ヒトラーの政治に同調できなくなったと言ったことは、彼の本当の上司であるスターリンの政治にも同調できないことを意

味していたのではないかと、私は後になって思った」と書いた。

ギランは独仏が戦争状態に入ったことで、アバス通信東京支局の重要な情報源だったブケリッチ経由のゾルゲ情報が入手できなくなることを憂慮し、引き続きゾルゲと目立たぬように接触するようブケリッチに指示した。この時点で、ギランはブケリッチがゾルゲ機関の有力メンバーであることを知る由もなく、後に「秘密接触の許可は皮肉であり、滑稽だった」と回想した。

戦後ルモンド紙に移り、何度も来日したギランは、ゾルゲの諜報網があらゆる場に潜入した大規模な組織だったとする連合国軍総司令部（GHQ）のウイロビー大將の発表には否定的だ。ギランは「この一連の事件には、ゾルゲというただ一人のスパイがいたただけだと私は思っている。諜報網というようなものなどなく、体制も組織もまった形としてはなかったのではないだろうか。ゾルゲ・グループは同じ信条を持つ仲間の集まりであった。ゾルゲという人間の価値は、単独行動で国家機密の中枢に食い込む快挙を成し遂げたことにある」と結論付けた。

筆者自身も、ゾルゲは強烈な個性、意志、魅力を持つ卓越したデスクで、有能な記者を配して取材させ、それを分析して打電したとみなしている。尾崎やブケリッチ、宮城与徳らも、ゾルゲがソ連のどの機関にどのような内容を報告しているのか知らなかった。デスクに踊らされた出先記者、またはストリンガーの役回りだったかもしれない。